

EdTechを学び、
追求し続けた4年間

さいたま市立大宮北高等学校(埼玉県) 出身

わたなべ
りゅうせい
渡辺 竜世

はじめに

私は大学4年間を通して「EdTech (エドテック)」について学んできました。EdTechとは、Education と Technology を合わせた言葉で、教育とデジタル技術の融合を指します。この分野は私の大学生活における大きなテーマの一つであり、卒業後の進路を考える上で決定的なものでした。

2019年に文部科学省は「GIGAスクール構想」という施策を開始し、全国で児童・生徒に一人一台端末の環境が整備されました。偶然、私の出身高校はかなり前から授業のデジタル化が進んでいたため、当時大学1年生だった私がニュースでこれを知ったときは、「日本に母校のような学校が増えるのか」と思いました。一方で「地域や生徒によってデジタル化に求めるものが違うのでは」という疑問も抱きました。そこで、生徒はどのような学びを求めているのか興味を湧き、それについて研究したいという意思が芽生えました。

ゼミでの学びと研究

私はグローバル教養やEdTechについて学べる斎藤裕紀恵先生のゼミに入り、教育のデジタル化についてこれまで研究を続けてきました。斎藤ゼミの学生として、Googleの教育部門、Meta (旧 Facebook)、Appleをはじめ、教育に関するさまざまなグローバル企業の方と関わってきました。特に、米国のImmerse社が協力のものとVR (バーチャルリアリティ、仮想現実) を用いた英会話レッスンの計画と実施をしたことは、常に新しい教育の形を追求し続ける重要性を知る貴重な経験となりました。

実際に端末を使って学習するのは現役の児童・生徒です。このような最新の教育の形に常に触れるゼミに所属している私は、彼らの実際の声を反映させた端末導入のきっかけとなるような研究をすべきだと考

えました。そして、実際の高校の英語の授業を録画・分析し、その授業の教師と生徒それぞれにICT化された授業への意見と感想を聞きました。卒業論文は、「高等学校におけるICTを活用した英語の授業の実態とその分析」をテーマに執筆しました。

Meta社シンポジウム登壇

2022年10月、幕張メッセにて、「CEATEC」と呼ばれるアジア最大級のIT技術の国際展示会が開催されました。私はこの「CEATEC」のMeta社シンポジウム枠で、VR英会話レッスンを計画・実施した体験談を発表する機会を得て、VRを利用することで「より興味深い授業を教師が構築するうえで一つの切り口になる」「自分の学びたい環境を生徒が自由にカスタマイズできる」という内容を述べました。VRは時間や空間にとらわれず、さまざまな事情を乗り越えて人々に学びの機会を届ける手段になり得ます。既にタブ



VR英会話レッスンの様子





CEATECでの発表の様子

レットで授業からテストまで完結させるケースがあるように、すべての学習がVR上の仮想空間、すなわちメタバースで完結させる未来がくるかもしれません。無限の可能性を秘めているVRを使った教育に、期待で胸を膨らませています。

シンガポール研修での経験

2022年11月7日から11日にかけて、斎藤ゼミではシンガポール研修が実施されました。そこではスタートアップ企業訪問やEdTech展示会参加、シンガポール国立教育学院の特別講義を経験しました。アジアでも有数の教育先進国であるシンガポールで得られた一番の学びは「EdTechで既存の教育をどう変えるか」についてです。国立教育学院の博士の講義では、「一つの答えを求める画一的な教育から脱却し、一人ひとりが持つ創造性を育てるためにはEdTechのサポートが重要である」というお話を聞きました。個別最適化された学びを追求する私にとっては、教育について考える上で重要な指針になるものでした。

また、シンガポールで久しぶりの観光もでき、充実した5日間を過ごせました。

まとめと私のこれからについて

私は高校でのICT教育の体験をきっかけに、大学では一貫してEdTechを追求してきました。国際情報学部で4年間存分にEdTechを学べたことを振り返り、私は本当にめざすべき学部に入学できたのだと実感しています。

将来は学生時代で得たEdTechに関する学びを、できる限り多くの人々に対して生かせる仕事ができると常に考えてきました。そこで文部科学省が最適な環境と考え、2023年4月より入省することに決めました。私は国家公務員という立場から日本の教育に対して何ができるのかを考え、常に全国の児童・生徒にとって最適解となる学びを追求していきます。



シンガポールマーライオン前にて